＞＞＞ 図書探訪　いわきの人物　歴史編＜＜＜

鍋田　三善　なべた・さんぜん　安永７年（1778）ー安政５年（1858）

鍋田三善は、磐城平藩の城下、搔槌小路(現在のいわき市平)に生まれました。通称を舎人、号は晶山、書斎を静幽堂と称しました。鍋田家は慶長 12 年（1607）に初祖・正光が安藤重信に仕えて以来、累代の安藤家の家臣でした。宝暦６年（1756）に主君・安藤信明（後に信成）が、美濃国加納（現在岐阜市）から磐城平の転封を命じられたのに伴い、三善の父・三房の代に平に移ってきます。三房は藩主の信任厚く、享和３年（1803）に家老を務めた禄高三百石の藩士でした。

天明６年（1786)、三善（9 歳）は、父の江戸詰に伴い大塚の安藤家下屋敷に移り住みました。父の影響を受けて学問を好み、兵学者・清水赤城の門に入り、多くの文人・学者と交流を深めます。文化元年（1804)、三善（27 歳）は、家督を継ぎ、同５年には中老になりました。同 11 年（1814)、藩命により平に戻り、磐城の地誌・歴史を調べます。文政 12 年（1829）に再び江戸詰となる 15 年間に、磐城の多色刷木版地図「改正陸奥磐城四郡疆界路程全図」、寺社・産物・名勝をまとめた「磐城名勝略記」を完成させました。

天保 12 年（1841）６月、江戸大塚の居宅に花火の火玉が落下し全焼、磐城時代に収集・執筆していた磐城の歴史書「磐城志」10 巻の稿本や多くの資料は焼失してしまいました。ただ、「赤穂義人纂書」の史料探索は晩年まで続けました。天保４年（1833）には、水戸藩から史料探索や考証の協力を求められるほどの人脈と業績の博学者であり、渡辺崋山・屋代弘賢・藤田東湖・小宮山楓軒など、交友の広さと博識は当時、類を見ないものでした。

大須賀筠軒　おおすが・いんけん　天保 12 年（1841）ー大正元年（1912）

大須賀筠軒は、磐城平藩の儒学者、神林復所の三男として生まれました。神林家は七俵二人扶持と禄高が少ない学問の家でした。８歳になった筠軒は、藩校・施政堂に入学、さらに安政６年（1859)、19 歳の時、藩の許しを得て幕府の学問所・昌平黌の大学頭の林復斎の門に入ります。文久２年（1862)、当時、老中の藩主・安藤信正が坂下門外の変で失脚、筠軒は学半ばで平に戻り、施政堂の世話役頭取（一人扶持）となりました。平藩は幕府からの追罰により５万石から３万石に減封となり、藩士を減らすことを計画します。筠軒は、帰農策を建議しますが、受け入れられず、元治元年（1864）に士籍を脱し、田之網村(現いわき市久之浜町字田之網)の大須賀家に入婿、大須賀家の家業である漁業や水産加工業に携わりました。

戊辰戦争後は佑賢堂と改称した藩校で講師を務め、その後明治８年（1875)、磐前県第四番中学校の教師を経て磐前県の地誌編輯掛となりました。翌９年、磐前県は福島県に合併され、筠軒は福島県雇いとなり、翌 10 年には内国勧業博覧会福島県委員を務めます。同 12 年には行方・宇多郡長に着任しますが、同 15 年に辞職。その後、定職に就かず各地を遊歴して画家として生計をたてた１２年間がありました。明治 27 年、福島県尋常中学校（現県立安積高校）の教師、同 29 年から 37 年は第二高等学校（現東北大学）で教鞭をとりました。

主な著作に三善の焼失した「磐城志」を再現しようとした「磐城史料筠軒稿本」（明治 20 年代中頃)、それを刊本にした『磐城史料』乾坤（明治 45 年)、ほかに「磐城郡村誌」（明治 11 年)、『美術漫評』（明治 19 年)、「磐城物産誌」（明治 24 年頃)、「磐城誌料歳時民俗記」（明治 25 年)、『緑筠軒詩鈔』（大正元年）があります。

高木誠一　たかぎ・せいいち　明治 20 年（1887）ー昭和 30 年（1955）

高木誠一は、北神谷村（現在のいわき市平北神谷）に生まれました。明治 34 年（1901）、旧制磐城中学校(現県立磐城高校)に進みますが、農家の長男に学問はいらないとの理由から２年で中退し、家業の農業に専念します。山崎延吉・横井時敬・小野武夫など、当時一流の農学者・農政学者・大学教授に農業生産技術・農業経営・農村社会の構造や歴史など、教えを請い、自らの農作物生産・農業経営に生かし、かつ農業補習学校・青年学校の生徒に指導しました。

明治 43 年（1910）、馬鈴薯を出品して農商務大臣より銀牌賞を、大正５年（1916）、模範農家として石城郡農会長表彰を受け、大正 11 年、玄米玉錦を出品して東京博覧会総裁賞金賞を受賞、翌 12 年には新嘗祭献穀粟謹作者に選ばれました。さらに昭和５年（1930）、農業個人経営優良により福島県知事賞、同 10 年、農事改良奨励により大日本農会総裁賞、翌 11 年、農村統計調査の功により農林大臣賞を受賞するなど、著名な篤農家でした。

また、明治 40 年、神奈川県・小田原報徳会の産業組合に関する講習会で、柳田国男との出会いがあり、民俗学に関わっていきました。同 43 年、新渡戸稲造を中心に柳田により「郷土会」がつくられ、石黒忠篤・木村修三・正木助次郎・小野武夫・小田内通敏などの農林官僚や農業経済学者・人文地理学者が参加、高木もその一人でした。大正２年に発刊された『郷土研究』に、いわきの民話・年中行事などを寄稿し続けました。昭和 10 年には、磐城民俗研究会を創設、会員は高木誠一・山口弥一郎・岩崎敏夫・和田文夫。同 12 年には、柳田国男がマルトモホールで講演会をしています。八代義定は高木を「よそのお百姓田の土かえす、ここでは心の田もかえす」、小野武夫は「自然科学ト社会科学ヲ両手ニ握リソノ家ソノ村ヲ経営シツツアル(人)」、宮本常一は「文字を持つ伝承者」と高い評価をしていました。

八代義定　やしろ・よしさだ　明治 22 年（1889）ー昭和 31 年（1956）

八代義定は、鹿島村大字御代(いわき市鹿島)の農家の三男として生まれました。鹿島村蔵持尋常小学校、そして小名浜高等小学校を卒業しましたが、父が親戚の事業に関連して財産を失い病に伏し、長兄は亡くなり、二男も病弱のため、進学を断念して、明治 35 年（1902）、家業の農業につきました。同 37 年から日本はロシアと戦争を始め、農民や農家の馬は軍隊にかりだされ、また天候不順により農作物の収穫は激減、農村の疲弊は深刻なものでした。八代は、この頃、二宮尊徳の農法を学び、マルクスの社会主義やトルストイなどのロシア文学に傾注しました。思想家の綱島梁川やマルクス主義経済学者の川上肇を知ったのもこの時期でした。

大正３年（1914）、山村暮鳥(詩人・伝道師)の文芸雑誌『風景』の発行に際して、激励・助力し、『風景』の同人に加わりました。同９年、地元の文学者・三野混沌(吉野義也)と若松せい(後の吉野せい)の縁をつくり、仲人を務めました。平を離れた病気の暮鳥一家を支援する「鉄の靴会」にも入り暮鳥の晩年を支えました。八代自身は短歌をつくっていました。

大正６年（1917）、歴史家・小此木忠七郎と知り合ったことから、考古学・人類学に関心を持つようになりました。同９年、福島県史跡名勝天然記念物調査委員会の委員となり、昭和５年（1930）に「福島県に於ける古墳の分布状態」を報告。同７年に「福島県藤原川流域の石器時代遺跡とその時代」を人類学雑誌に発表し注目されました。戦後、八代は昭和 21 年（1946）４月、第１回衆議院議員の総選挙に「文化財保護」を公約に立候補し落選しましたが、翌 22 年４月、鹿島村長に当選、２期務めました。同 27 年、第１回福島県文化功労賞を受賞しています。

諸根樟一　もろね・しょういち　明治 26 年（1893）ー昭和 26 年（1951）

諸根樟一は、川部村大字沼部（現在のいわき市沼部町）に生まれました。村立小学校を１番で卒業しますが、家業の関係で旧制中学校には進めず、早稲田工手学校で学び測量士となります。大正７年（1918)、実家に戻り、大日本炭鉱に勤めました。同 11 年、川部の青年を集めて、郷土を知り未来を切り開こうとする団体「郷土自由学堂」を立ち上げ、翌 12 年１月に「郷土文化」を創刊します。同じ頃、平町（現在のいわき市平）に引っ越し、同 13 年には古本屋「郷土社」を開店。諸根は「郷土研究」の普及と賛同を得るため、雑誌『郷土文化』に加えて研究雑誌『名古曾』、新聞『新いはき』も発行しました。それらを支援する「郷土文化会」の会員となった三猿文庫主・諸橋元三郎との出会いはこの頃でした。

昭和２年（1927）７月発行の『磐城文化史』により、諸根は郷土史家として認められ、翌３年９月には『磐城史料図版集成附綱要磐城史概論』を発行。しかし、同年 12 月 30 日、平劇場の火事が家屋に類焼、『福島県政治史』中・下巻などの原稿・史料を一瞬に失ったのです。救いは印刷所に入れてあった『福島県政治史』上巻を昭和４年４月に、また諸根の実家の勿来庵にあった原稿により『綱要石城郡町村史』を同年 10 月に発行できたことでした。

昭和６年２月、諸根は京文社に職を得たことと、東京大学史料編纂所の史料閲覧が自由になったことから東京に引越します。上京後は「勤皇、崇祖の二大精神」の普及と調査記録の発表の雑誌『勤王』（後の勤皇と改題）を発行しました。在野の学者の最後の出版物は『吉田松陰の東北遊歴論纂』でした。

● 展示資料　　〇主な参考文献

鍋田三善

●「改訂陸奥磐城四郡疆界路程全図」鍋田三善　文政 11 年（1814）　復刻・昭和 56 年（1981）
●「陸奥国磐城名勝略記　全」　鍋田三善　文政 11 年（1814）　復刻・平成６年
〇『陸奥国磐城名勝略記　解説』　菊池康雄　平成６年２月
●「写本　磐城志」（鍋田三善）　江戸期
●「写本　岩城文書」上・中・下　（鍋田三善）江戸期
〇『いわき史料集成』第三冊「岩城文書」上・中・下所収　昭和 63 年（1988）（210．0/1/イ）
●『赤穂義人纂書』（鍋田三善）第一・第二　明治 43 年（1910）
●『赤穂義人纂書』（鍋田三善）補遺　明治 44 年（1911）
●『江戸諸家人名録　巻上(天保７年)』国書刊行会　大正７年（1918）
〇「鍋田三善と書簡集『晶山蘭臭』小野一雄　いわき地方史研究 42 号　平成 17 年

大須賀筠軒

●『美術展覧会出品目録』甲・乙　（大須賀筠軒）　明治 19 年（1886）11 月
〇『いわき史料集成』第一冊「美術展覧会出品目録」所収　昭和 62 年（1987）（210．0/1/イ）
●『美術漫評』上・下　大須賀筠軒　明治 19 年（1886）12 月
〇『いわき史料集成』第一冊「美術漫評」所収　昭和 62 年（1987）（210．0/1/イ）
●『磐城史料』乾・坤　大須賀次郎　明治 45 年（1912）３月
●『緑筠軒詩鈔』一・二・三巻　　大須賀筠軒　大正元年（1912）10 月
●『緑筠軒詩鈔　全』六分冊　大須賀筠軒　大正元年（1912）
〇『磐城史料筠軒稿本』大須賀筠軒　明治 20 年代中頃　復刻・昭和 49 年（1974）
〇『いわき史料集成』第五冊　「磐城志料稿本」所収　平成４年（1992）（210．0/1/イ）
〇『大須賀筠軒』大須賀筠軒詩碑建立会　昭和 62 年（1987）８月（389/オ）
〇『磐城誌料歳時民俗記』大須賀筠軒　翻刻・夏井芳徳　平成 15 年３月（380/オ）
〇『磐城物産志』大須賀筠軒　翻刻・夏井芳徳　平成 18 年7月（602/オ）

高木誠一
●「磐城の民謡、子守唄、手まり唄、田植え唄、地搗き唄」高木誠一自筆ノート　昭和 10 年前後か
○『磐城の民謡・民俗学ノート』高木誠一著・夏井芳徳校注　平成 22 年 12 月（388/タ）
●『磐城地方の石に関する民間伝説』　昭和 10 年（1935）12 月　磐城民俗第 1 輯
●『磐城地方の樹に関する伝説』昭和 11 年（1936）4 月　磐城民俗第 2 輯
●「石城の水の伝説」昭和 11 年（1936）7 月　磐城高等女学校「校友会雑誌」抜刷
●「石城の石の伝説」昭和 12 年（1937）磐城高等女学校「かをり第 5 号」抜刷
●「続石城の伝説」昭和 12 年（1937）7 月　磐城高等女学校「めばえ第 4 号」別刷
○『旅と伝説』第 7 年 7 月特輯　昭和 9 年（1934）7 月（386/タ）
●『磐城北神谷の話』高木誠一　日本常民文化研究所　昭和 30 年（1955）12 月
○『磐城北神谷誌』　高木誠一　翻刻・夏井芳徳　平成 19 年 1 月　(384/タ)
○『潮流』第 6 号　高木誠一特集　いわき地域学會　昭和 60 年（1985）10 月 (K/289/ム)
○『忘れられた日本人』宮本常一　ワイド版岩波文庫（K/210.1/キ- M）
八代義定
●『岩代全国磐城国南部土性図説明書』明治 24 年（1891）
●『トルストイ翁　人生の意義』河上肇・小田頼造共訳　明治 39 年（1906）
●『梁川遺稿　我観録』網島梁川遺著　明治 42 年（1909）
●『唯物史観研究』河上肇　大正 13 年版（1924）
●『考古学講座　第参号』大正 15 年（1926）
○「福島県に於ける古墳分布の状態」八代義定
　『福島県史跡名勝天然記念物調査報告五』　昭和 5 年（1930）（210..2/0/フ）
○「福島県発見石器時代土偶図版解説」小此木忠七郎
　『福島県史跡名勝天然記念物調査報告四』　昭和 5 年（1930）（210..2/0/フ）
○『いわき民報』昭和 21 年（1946）3 月 15 日(第 1 回総選挙候補者略歴)
●『日本考古学年報　1（昭和 23 年度)』日本考古学協会　昭和 26 年（1951）
○『残丘舎遺文　八代義定遺稿集』八代義定　平成 13 年（289/ヤ）
○『八代義定蔵書目録』菊地キヨ子　平成 13 年（029/キ）
諸根樟一
●『郷土文化』創刊号　郷土社　大正 12 年（1923）1 月
●『新いはき』第 7 号　大正 15 年（1926）6 月 15 日
●『磐城文化史』諸根樟一　昭和 2 年（1927）7月（210.1/1/モ）
●『磐城史料図版集成附綱要磐城史概論』諸根樟一　昭和 3 年（1928）9 月（210.1/モ）
●『綱要石城郡町村史』諸根樟一　昭和 4 年（1929）10 月（三猿/210.1/1/モ）
●『福島県政治史 上巻』諸根樟一・草野順平・諸橋元三郎　昭和 4 年（1929）4 月（三猿/312/フ）
●『名古曾』第 3 号　昭和 5 年（1930）3 月／第4号　昭和 5 年 6 月（210.0/1/ナ）
●『磐城誌料叢書』第 1 回　勿来文庫　昭和 5 年（1930）（三猿/210.1-1/イ）
●『磐城誌料叢書』第 2 回　勿来文庫　昭和 5 年（1930）（三猿/210.1-1/イ）
●『勤王』第 1 巻創刊号　昭和 12 年（1937）11 月
●『吉田松陰東北遊歴論纂』昭和 20 年（1945）（三猿/210.5-1/モ）

○『図説いわきの歴史』監修・里見庫男　郷土出版社　平成 11 年（K/210. 1-1 /イ）
○『いわきふるさと大百科 決定版』監修・里見庫男　郷土出版社　平成 19 年(K/210.1-1/イ）
○『いわき市史・第 6 巻 文化』いわき市史編纂委員会 いわき市 昭和 52 年（1977）（K/210.1/イ）
○『いわきの人物誌（上)』いわき地域学會　いわき市　平成 4 年(K/281/イ)
○『いわきの人物誌（下)』いわき地域学會　いわき市　平成 5 年(K/281/イ)

展示協力者　小野一雄・鍋田三雄・鍋田岩男・八代純一・八代彰之

会期　平成 25 年(2013)1 月 10 日(水)－5 月 12 日(日)
会場　いわき総合図書館 5 階　企画展示コーナー